四月十三日　夕刊

常磐毎日新聞

日刊

定價一部金貳錢　月金五拾錢　郵税五厘
廣告料五號十二字詰一行金五拾錢
日曜祭日の翌日休刊
發行兼編輯人印刷人　川崎文治
福島縣石城郡平町長橋町三五
發行所　常磐毎日新聞社　電話六三〇番
印刷所　常磐毎日印刷株式會社

白虎隊と

なよ竹の碑 (2)

安倍季雄

佐原盛純の詩にあります

「衆寡敵せず、戰ひ且つ郤く、身は創痍を裹んで口藥を含む腹背皆敵、將たいづくにかゆかん劍を杖ついて暫く息ふ天女ヶ岳南鶴ヶ城をのぞめば烟燄あがる、痛哭涙をのんで且つ彷徨す。宇社己に亡び吾事畢る君恩唯正に一死を以て償ふべし。十有九人心肝鐵なり、意氣從容同じく節に殉ず」

また長い詩ですが、あとは略します。詩には十有九人とありますが、腹を切つたのは二十人で、飯沼貞吉だけが、虫の息で殯れて居る處を助けられたのです。

ノート

北斗七星の斗の字は昔支那で水を飲むに用ひた柄杓のことである即ち七星のかたちから來た名稱だ

私は、子供の時に、あの詩を讀んで何度泣いたか知れません。壯烈正に鬼祝を泣かしむべしで、私が昨年五月六日の子供の時間に、靜岡放送局から放送した二本松少年隊十二歳から十七歳までの少年が二十五人、何十倍もあらうといふ敵の大軍を、二本松の城外、大壇口に擊迎つて、東北健兒の意氣を中外に示した最後の奮鬪ぶりと併せて、永遠に傳ふべき千古の美談だと信じます。

◎明日の献立◎

【朝】味噌汁――葱　小付皿　こんぶ

【晝】豚肉　味噌つけやき

【晩】卯の花合へ小海老　タンススコー

二

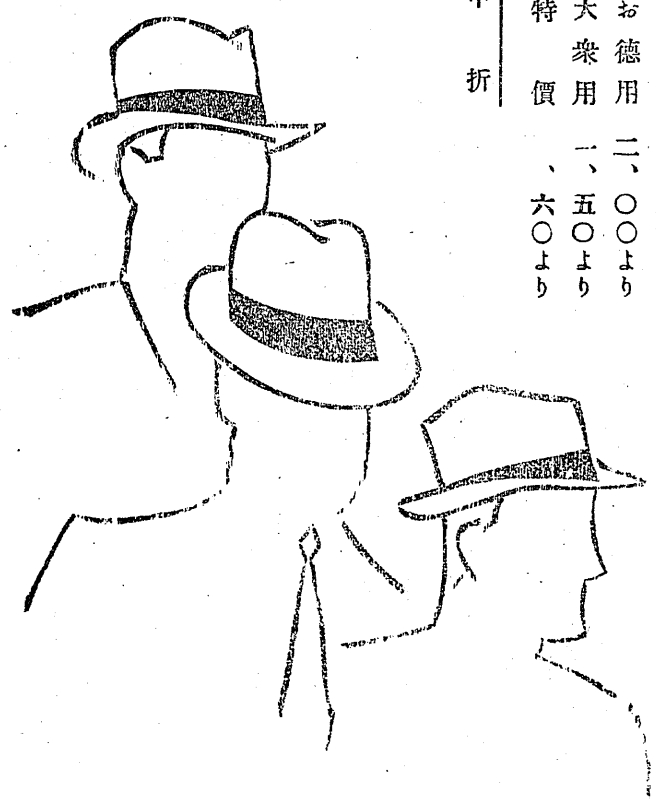
春が來て、秋が來て、今年で丁度六十七年になります。今も猶ほ香花のたゆる時なき彼等少年勇士のお墓の前に佇んで、糸の如くたちのぼる香煙を見つめて、何かしら涙ぐまされた私はどうしてそんな小さな子供に、あのやうな立派な働きができたのかしらと考へた時、私は期せずして「揺籃を動かす母の手は、やがて世紀を動かす」と道破した大教育家ペスタロッチの言葉を、今更のやうに思出したのであります。

飯盛山で自刄した白虎隊員二十人の傳記を、仔細に讀んで見ると、その大部分が賢き母によりて育てられた子供達であります。しかも其の中の六人までが、世にいふなさぬ仲の母子である事も面白いと思ひます。

私はそれ等の事實を確かめ、更に飯盛山上に建てられてある「會津藩、殉難烈婦碑」を仰ぎ見て、是れあるかなと思つたので、即日會津婦人會の秋月さんの御案内で若松市外門田村、青木の善龍寺に新たに建立された「なよ竹の碑」をおとづれ、その碑前で、時を同じうして國難に殉じ、あつぱれ婦德を全ふした二百三十三人の會津婦人の壯烈なる最後と、悲痛なる心事とをきいて、私の考への誤りでなかつた事を一層深く痛感したのであります。「會津殉節婦人の事蹟」の一節に、古來會津の婦人は無事太平の日にありては、唯だよく家事に專念して、子女を養育するを本分とする平凡人に過ぎなかつた。然るに一度戊辰の變亂に遭遇するや、男裝して戰線に加はる者があるかと思へば父兄や夫をして後顧の患なからしめる爲、手づから老人や子供を刺殺して、然る後に立派に自刄した者が斯く多數に達したのは、全く藩祖以來養成された一國風教の感化に基くものに相違ない、と書いてあります。此の母にして此の子あり會津婦人の腹から、白虎隊のやうな偉い子供が生れたのは、決して偶然ではなかつたとしみ〴〵思つたのであります。

喜多流謠曲と仕舞の
お稽古を奬め致します
平町田町六九
喜多流 謠曲 仕舞　白土會
電話一二七番

春の中折帽子と
ネクタイ賣出し
35年代用の流行品が豐富に取揃へました



◎春パラソル日傘十五日より陳列
本絹最上　一、五〇より
本絹上　一、〇〇均一
人絹上　、四五均一
昨春殘品只今のサービス定價の半額品陳列

ネクタイ
本フワー　六、五〇より
お徳用　二、〇〇より
大衆用　一、五〇より
特價　、六〇より

中折

大黑屋
平町三丁目

今春の人氣を獨占する名盤
發賣開始!!!
サクラ。平のサクラ音頭
素晴しい春の序曲
コロンビアレコード
平よいとこ
磐城甚句
まづ御試聽下さい
御買求めは是非弊店へ
……各社レコード新譜續々入荷……
金光堂時計店
平・五　電一九五

見習生募集
十四才より十六才迄
高橋時計店
平町二丁目
西村屋藥店
トナリのトナリ

店主か店員を連れて行かれる
正シイ食堂
正シイ喫茶
正シイ酒場
平・田町
レストラン サロン
電二五三番

譽れの表彰旗披露

式は第一校・松ケ岡で祝賀宴

あす平消防豪華版

既報平消防組が過般日本消防協會より全國消防の優良組として内務大臣より授與された表彰旗披露式は明十四日午前九時から畠田本縣警察部長臨席のもとに第一小學校講堂で關係者五百餘名を招待華々しく擧行するが式は青沼町長の開會の辭に初まり慰靈祭及び功勞者表彰式に次ぎ表彰旗披露があり、更に町長式辭、組頭挨拶、來賓祝辭等を以て式を終り最後に同校庭に於いて組員の規律訓練、機械繰練があり零時半からは松ケ岡公園に移つて大祝宴會を催されるが當日は平町より井上組頭に對し加勞者として三ッ組銀盃の記念品を贈る外左記五消防顧問に感謝狀、七組員は永年勤續者として表彰されると授賞者左の如くである

(消防顧問)山崎與三郎　柳田榮太郎　鈴木堅助　柏原幸次郎　石坂栓太郎

(表彰組員)四十年勤續高根澤長太郎　三十四年涌井兼治　三十三年根本幸次郎　卅二年岡田長太郎　卅年鈴木長三郎　廿九年古山吉之助　廿五年鈴木彌太郎

祭典は十五日午前十一時より内郷山神社前にて執行する

馬質著しく劣惡

黑田の駒セリ成績

石城産馬組合は十日より昨十二日迄の三日間田人村黑田部落に於いて春駒糶市を開いたが出場頭數は百二十六頭、總上賣高七千百四十三圓で最高百三十圓、最低十五圓、平均五十六圓六十九錢の成績であつたが昨年に比較すると出場頭數は同じであるが賣上高に於いて五百六十三圓、平均額は四圓四十六錢の何れも減額を見たのは同地方本年度の馬質が非常に低下した爲で最低額一頭十五圓也の馬は郡下でも珍らしいと、同糶市場の優良馬左の如くである

(牡馬)一等綠川音次郎　二等蛭田清吉　三等蛭田充

(牝馬)一等加茂常丸　二等小宅竹次郎　三等蛭田善吉

磐炭山神祭

十五日から三日間

恒例の磐城炭礦山神祭は來る十五日より三日間全山あげての觀樂境を現出する

花に集ふ二千名

平署管内消防檢閲

平警察署管内四十八ケ町村の春期消防檢閲は來る十九日午前九時から磐中グランドに於いて行はれるが當日午前八時迄に平町に集合する消防組員約二千名は本町通りに整列、人員点呼を行つて隊伍堂々と行進を起し正九時より磐中グランドに於いて教練、機械器具の繰練各種競技等があり最後に優良組員の表彰があり午後二時からは松ケ岡公園で觀櫻會を開く豫定で當日の平町は消防組員で賑ふ筈

郡下四ケ所で農耕指導

縣の凶作對策

縣では郡下山間部落の凶作防止對策として農家の聞種改善を畫る爲め實地指導地を設け栽培技術の指導を行ふべく設置農村を調査中であつたが今回田人箕輪澤渡各組合村及び川前の四ヶ村と決定した

農事特別傳習

十七日から開始

神谷農事試驗分場の來年度農事特別傳習會は十五回に亘つて行はれるが第一回は來る十七日午前九時から同場で春播蔬菜の栽培法に就いて矢ケ崎技手が講演する

平三學校へ常備看護婦

十五日から設置

昨報平町三小學校へ常備看護婦設置に關しては町當局と三學校長協議の上來る十五日より實施される事になつた

平町人事

□出生

△大工町當時内郷村字瀧丹野玉磨氏三女敬子

△正月町鈴木文治氏三女惠美子

回婚姻

△紺屋町五三櫻田福治(二四)氏豊間村字薄磯鈴木トヨ(二二)

△内郷村字堀坂小菅俊雄(三一)氏久保町當時内郷村字綴富岡ヨシ(二四)

洋食
茶喫
宴會
ビフテキ　エビフライ
度有難うございます
◎女給數名募集◎
コンパル
平驛前新道通り
666・ETT

看護婦急派の求めに應じます
平町南町
平看護婦會
電話三〇七

木炭代用
月星豆炭　一八キロ壹袋
金八十錢
平驛前
㊫阿部石炭商店

拜啓陳者去る十一日井上茂作氏慰安會の際は多數御出席被下御蔭を以て非常に盛會を極め感謝に不堪候遂一御禮可申上筈に候へども御尊名伺ひ洩れも可有之乍失禮紙上を以て御禮申上候

匆々敬具

昭和十年四月十三日
發起人
青沼鋒太郎　野崎滿藏　諸橋久太郎　萩原義雄　佐々木龍若　坂本隆藏　關内正一

電話新設
電話五一八番
平町松ケ岡公園内
春木亭

おんやちンノのしよとひお
文駒郡本　(36)

印刷の御用は設備完全の『常磐毎日』へ
電話六三〇

貨物自動車が列車と衝突

運轉手等瀕死の重傷

けさ末續の惨事

双葉郡廣野村大字下淺見川字築地二二根本良一方自動車運轉手鈴木平之丞（二五）は十三日朝久之濱町より砂利運搬すべく助手遠藤松雄（二三）同乘のトラックを運轉午前六時四十分頃久之濱町大字末續字坂下地内國道の踏切に差し掛つた際約百米前方の隧道から進行してきた第二〇二號上り急行列車と衝突、兩名は瀕死の重傷を負ひ直ちに四倉町木村病院へ擔ぎ込み加療中であるが同踏切は無監視にて約四五間迄近づかざれば見透しの利かぬ地点にあり以前にも度々同樣の事故を起し魔の踏切と恐れられてゐた處で四ッ倉署神長部長は現場へ急行目下詳細取調べ中である

匕首で脅かす三人組醉漢

悉く平署に檢擧

小名濱町本町中島義雄方土工菅野義松（二二）及川政雄（二一）金幸七（二五）安藤正直（二二）の四名は昨十二日午後八時頃同町竹町料理店壽亭方で泥醉四圓餘の代金は支拂つたが引上げる際銘々双渡五寸餘の匕首を懷から出し逃げ廻る女中らを追ひ散らす騒ぎに駈け付けた駐在所員に檢擧され直に平署に押送取調中であるが前記四名は常に一團となり匕首を呑んでは町内の料理店カフェー等を脅してゐる不良團なので餘罪あるらしいと

漁場荒しの勝治へ

懲役一年を求刑

双葉郡久之濱町字東町四八當時住居不定無職遠藤勝治（二一）に係る窃盗事件公判は今十三日午前十時平區裁判所小林判事係りにて開廷され、同人は昨年八月中石城郡江名町字北町漁業吉原龜吉方へ雇はれ中倉庫よりベアリングメタル三ケ（價格百五十圓）を初め二月十八日より三月八日迄の間同僚の村山某齊藤某の二名と共謀し同町江名魚市場へ預けある中山清七外十九名の魚類（價格三百三十二圓）を窃取したもので清田檢事より懲役一年を言渡されたが判決言渡しは來る十五日であると

平消防組檢閲豫行

平消防組は來る十九日の平署管内春期消防檢閲に備へる爲め本十三日午前九時全員を招集し第三小學校庭で豫行演習を行つた

三島家所藏の『國信』の名刀

重要美術指定申請

石城郡鹿島村字下藏持の素封家三島五郎氏秘藏の刀について縣の史蹟調査會で調査中だつたが刀は今から五百七十七年前延文二年早谷部國信の作になるものである事が明かとなり調査會では重要美術品取締法に依る指定を申請することになつた、この刀は長さ一尺二寸六分、双先九寸六分五厘、幅六分三厘、そり三分で類稀な銘刀である國信の作は秋田神宮にあるものか既に國寶に指定されてをり今度のこれが重要美術品として指定されることは明かだと調査會では信じてゐるなほ重要美術品取締法に依る指定申請は本縣ではこれが初めてゞある

強盜の幸作懲役五年

判決言渡し

双葉郡熊町村大字小入野字赤野〇地詐欺前科一犯吉田幸作（二五）に係る強盜並に詐欺事件は今十三日午前十一時中島裁判長係り小林、香西兩判事陪席、白水檢事立會公判開廷求刑通り懲役五年を言渡された

古河鑛大祭

十六日に大山神で

好間村古河炭礦では來る十六日午前十時より同所大山祇神社大祭を擧行するが折からの花爛漫と呼應し盛況を豫想されてる

少年消防入隊

平第一小學校にては今十三日第三校より高等科兒童二百六十名の少年消防隊入隊式を行つた

春は惱まし！

大事な虎の子の遺失物

受付けに大童べの平署

花の春ともなれば街行く人の氣持もツイ浮き足となり大事な虎の子を落しても氣付かぬ日が續くと平署には紛失物殊に大事な墓口、財布等紛失届がメッキリ增いて來る、平町新川町の田中宜治さんは去る七日夜八時頃大町地内で大枚十八圓入墓口を落して青くなつて届出たが次の日には仲間町の中學生新井美照君も五圓一錢を落し、同町の根本ツタさんも四圓九十錢入財布を驛前通りで失ひ、十日には一丁目の井戸川チエさんが三丁目通りで三圓在中の墓口を落して届出た外一圓二圓の紛失届がザラに出て居り係官も天手古舞ひの形である

明日のラヂオ

十四日

仙台放送局

今晩の部

▼後六、〇〇 子供の時間 お話「勿來の關趾を尋ねて」中瀨武
▼後六、二五 講演「後藤新平伯の七週忌を迎へて」永田秀次郎
◎花の週間（第七夜）◎
▼後七、三〇 歌謠曲 柳橋連中
▼後八、〇〇 漫談「鰻の龍宮」德山夢聲
▼後八、三〇 常磐津「三世相道行蝶吹雪」常磐津仲登良
▼後九、三〇 時報 ニュース 氣象通報 番組豫告

明日の部

▼前九、三〇 子供の時間 ラヂオ見學「故佐久間艇長を偲ぶ」海軍潛水學校副官 海軍少佐 藤谷一宅
▼前一〇、〇〇 日躍勤行 京都市下京區堀川通七條 眞宗本願寺本山御影堂より中繼
▼前一〇、四〇 講演「合金の性能と其の進歩」東北帝大教授 理學博士 村上武次郎
▼前一一、一〇 趣味講座「春に於ける小鳥の世界」早川 敬止
▼後〇、五〇 滿洲より講演「滿洲の交通と北滿鐵道」滿鐵副總裁 八田 嘉明
▼後一、二〇 レヴュー「文七元結」 榎本健一外
▼後二、〇〇 俚謠 兵庫縣八木村船謠曲保存會他
▼後二、二〇 俚謠（新人）福島縣相馬郡原町今田清介外
▼後二、四〇 漫談「スタンドチエリー」春雨家雷藏
▼後六、〇〇 子供の時間（臺北より）「山の子供達のお話と唱歌」角坂山教育所兒童六名外
▼後七、三〇 浪花節「嵐の孤兒」天光軒滿月
▼後八、〇〇 琵琶「忠犬ハチ公」 高倉 旭仔
▼後八、二五 舞臺劇「新版歌祭文」尾上菊五郎外大勢

氣象通報

今晩も明日も北東の風曇模樣

職業紹介所報告

回 人を求める方

▽新聞配達 十五六才 二名 市内居住者
△精米雜役 二十前後 尋卒 月七八圓
△小店員 十六才 高卒
△女中 四十以下 尋卒 月三四圓

回 職を求める方

△農夫 三十才 中二修
△小店員 十七才 高卒
△料理人 二十七才 高卒
△土工 三十八才 無學
△時計工 十八才 高卒

美味！芳醇！
宗正らひた
山崎合名會社
電話一〇番

市原醫院
平・田町
電話一一四番

明治太平記

（無斷轉載上映及上演）

（作）寺島柾史
（畫）野口

第九十九回

間諜往來（4）

『なるほど、そのとほりでございます。是非決行してください。及ばずながら拙者も、その暗殺の一員に加はります』

畑は、また、にぎりこぶしでふなべりをたゝいた

『およし、船頭は、ほんとうにおしかな』

丸山は注意ぶかい眼でおよしをかへりみた。

『えゝ大丈夫ですわ。立派なおしなんですの』

『およし』

『はい』

『おまへの三味の音じめがどうやらゆるんだぞ』

『……』

『何か、胸にわだかまりがあるのだらう。それが三味の音色にも現れてをる』

『……』

『雲井のことで胸いつぱいなのだらう。察するよ』

『あら……』

『雲井は、去る八月十四日に米澤から護送されて、傳馬町の牢へぶちこまれてをるといふが、その後の様子は……』

『はい』

およしは、急に打ちしをれ、輪廓のとゝのつたきれいな顔をふせてしまつた。

『雲井の壯擧も、時勢にはかてず、水泡に歸したが、しかし雲井の遺志をついで天下に事をあげるものがきつとあるよ』

『はい』

『われ／＼の勤王黨とて形態こそ變つてをれ、雲井のとむらひ合戰のやうなものだ』

『どうぞ、いまの話、きつと成就させてくださいまし……』

およしは、丸山のついだ酒をくちびるにあてた。

『雲井はからだを損ねてをるといふが大丈夫かな』

『ところが……』

『おう、どうした』

『あの方、もうだめなんですの』

およしは、さういつたまゝ眼にいつぱい涙をためた

『だめとは、つまり、死期が近づいたとでもいふのか……』

『雲井さまはじめ、原直鐵さま、大忍坊さまはじめ七人の方がみんな死罪にきまつたさうです』

『なに、死罪に？』

『え、この二十八日に牢内で』

と、いつて、聲をのんだ

『牢内で斬罪か、うむ』

丸山は、およしの襟足をじいとみつめた。

『いつそ反戰論者暗殺のついでに、傳馬町の牢屋をもおそふて、雲井氏等をたすけようではございませんか』

血氣の畑は、さういつてみたび船べりをたゝいた。

が丸山はそれにこたへず船尾の方へ投げてゐた眼をけはしく輝かした。

『おい、船頭を……』

『えッ！』

ふたりの視線も船尾へ走つた。が、船頭はおし、船尾にしよんぼり立つてしづかに船をすゝめてをる。何の變哲もなさそうだ。

『船頭がいかゞいたしましたかな』

畑は、船尾へ投げた視線をもとへもどしてたずねた

『船頭をこれへ呼んでもらはう』

『何か？』

およしはふしぎさうに丸山をみた。畑は立つていつた。

『おい船頭、ちよいと屏形の中へ來い』

『……』

しかし、おしの船頭は默々と船をこぐばかりだ。

櫻花の季節になりました
お花見の折詰は!!!
是非 茶家の折詰
時節柄價格低廉
奉仕的勉强致します
平町一丁目
茶家
電話一四一番

一册の代金で
御希望通りな
五册の雜誌が
自由に讀める
川崎巡回文庫
電六三〇番
（申込次第規則書進呈）

新發賣〜〜〜